

教職大学院

Newsletter No. 143

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2021.2.20

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2021

VIRTUAL (Online) SPRING SESSIONS 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2021
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001
実践研究 福井ラウンドテーブル

2021 Spring Sessions
20(sat) 10:00-17:40
21(sun) 10:00-14:10

Cyber Space Co-inquiry and Reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2021.2.20-21

教師教育改革コラボレーション/福井大学・連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
後援:福井県教育委員会 共催:社会教育実践研究フォーラム

内容

- ラウンドテーブルによるこそ (1)
- ラウンドテーブル=実践し省察するコミュニティ
をめぐる二つの断章 (2)
- 全体スケジュール (4)
- 教職大学院特別フォーラム (5)
- ZoneA 学校 (6)
- ZoneB 教師教育 (7)
- ZoneC コミュニティ (8)
- ZoneD International (9)
- ZoneE 探究 (10)
- ZoneF インクルーシブ (10)
- Round Table Cross Sessions (12)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (13)
- ラウンドテーブルの歩み (15)
- 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (17)
- アーカイブ (19)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2021年2月の開催をもって40回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、オンライン（Zoom）にてVIRTUAL (Online) SPRING SESSIONSを開催いたします。2月20日（土）には、教職大学院改革特別フォーラム、6つのテーマに即したZONE SESSIONS、2月21日（日）には小グループ（5名程度）で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

【Zoomを用いたオンラインのバーチャルセッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

(1)2月19日(金):2月20日(土)申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。

(2)2月20日(土):2月21日(日)ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

*Zoom URL が未受信の場合には dpdfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間に Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

ラウンドテーブル＝実践し省察するコミュニティをめぐる二つの断章

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長
柳澤昌一

I ラウンドテーブルと専門職の学習コミュニティ

工学・医療看護・教育をはじめ、多様な分野における専門職教育改革に大きな影響を与えてきた『省察的实践者の教育』※の中で、ショーンは省察的实践の力を培う三つのアプローチを、事例に基づいて提起している。一つは、卓越した技(artistry)を持つ実践者の実践プロセスを徹底的に追うこと、跡づけることであり(follow)、二つ目はそうした実践者とともに実践状況の中で協働の実験に取り組むこと(joint experimentation)であるが、三つ目のアプローチとしてショーンは「鏡のホール」(hall of mirrors)と名付ける状況での学びを挙げている。

心理療法・精神医学における協働事例研究のセミナー、そしてショーン自身が盟友アージリスとともに取り組んできたコンサルテーションの力を培うセミナーの取り組みを踏まえながら、ショーンはそれぞれのメンバーが自身の実践の経過、そこでの壁や試行錯誤のプロセスを開示し、聴き手がその経過を自身のこととして捉え考えていく状況、長期的な実践の展開を互いに照らし合いながら探究し共有してプロセスとその状況を「鏡のホール」、〈協働省察のホール〉として、省察的实践の力を培う三つ目の、そして包括的なアプローチとして提示している。

省察のホール状況では、実践の長いプロセスが語られ、跡づけられる。そしてそこで描き出された経過と状況の中で、それをどう捉え展開を探っていくか、協働の探究と思考実験が展開されていくことになる。第一・第二のアプローチが連動して持続的に開かれた場で展開されていく場が、〈協働省察のホール〉ということになるだろう。

2000年に「実践し省察するコミュニティ」をテーマとする実践研究福井ラウンドテーブルが発足したとき、手がかりとなり拠り所としたのは国立市公民館保育室における学習・記録・セミナーや長野県松川町における住民による健康問題集会の組織論であり、伊那小学校や堀川小学校、福井大学附属中学校の共同研究の編成であり、それらから学びつつ福井大学の学部・大学院で培ってきた実践研究・学習過程研究のアプローチであって、ショーンの提起に私たちが接するのはずっと後のことになる。しかし、長期にわたる実践を跡づけること、それを互いに自身のこととして聴きつつ協働探究すること、そしてそうした探究をより開かれた場で持続的に展開することの意味、その営みが実践者としての力を培う重要なサイクルとなることはその出発点から明確に意識されており、それはショーンの三つの提起とも重なっている。

社会的な主体、そしてその重要な軸である専門職としての力を培うことの重要性の自覚の高まりと要請は、ややもすれば短期的な達成をめざす断片的スキルのトレーニングやそれと連動する羅列的チェック項目による評価・数値化に傾きやすく、それらは専門職としての力量形成の、試行錯誤と主体的な再構成を含む長い道行きを切断し閉ざしていく強力な障壁としても働くこととなる。そうした危うい状況が進みつつある中で、専門職として学ぶ力を互いに培っていくアプローチを、実践を通じて提起していく。ラウンドテーブルの役割は、新しい専門職学習コミュニティの組織をめぐる展望と結びついている。

Schön, D.A. (1987). *Educating the Reflective Practitioner*. Jossey-Bass. [柳澤昌一・村田晶子監訳 『省察的实践者の教育』 鳳書房, 2017.]

II 大学の理念:探究者の学習プロセスとそのコミュニティを支える

(以下の一文は福井大学高等教育センターの News Letter No.1 2010. 7. 25 に「シリーズ大学論 1」J.ハーバーマス「大学の理念—学習プロセス」という表題で掲載したものである。)

「大学の理念」という表題で、ヤスパースの同名の著作を想起される方も少なくないだろう。1923年、第一次世界大戦後の状況で表されたこの著作は、1945年、再びの敗戦の後改めて出版され、1961年にさらに新訂版が刊行されている。「大学の理念を自らの内に持つものだけが大学のために問題に即して考え、活動できる。」この言葉、あるいはその「理念」を、現代の大学の状況にあって私たちはどうとらえるべきなのだろうか。

1985年から翌86年にかけてハイデルベルク大学において行われた「大学の理念」をめぐる6人の研究者による連続講演は、このヤスパースの著作とその問いへの30年を経た時代における応答という性格を持っている。1960年代末、世界的に広がった大学への懐疑と批判、その後繰り返される内と外からの大学改革の展開、そしてユニバーサル段階に向けて否応なく拡大し変貌し続けている大学の中にあって、大学の求めるべきあり方(理念)をどのように見定めていくべきなのか。1980年代半ば、この連続講演が行われた時期には、現在に至る大学の現状と問題はすでに現実のものとなっている。そうした現実の中にあって、大学の現実と歴史を踏まえあえて「大学の理念」を語るとすれば、それはどのような意味と可能性を持つのか。ガダマーに始まり、ハーバーマスによって締めくくられるこの論集は、そうした挑戦に応えようとするものとなっている。

ここでは、この連続講演の最後に登壇したハーバーマスの議論に触れておこう。「大学の理念—学習プロセス」(Die Idee der Universität—Lernprozesse)と題するこの論稿の中で、ハーバーマスはヤスパースを基点に、シェルスキーやパーソンズらの大学論、リンガーらの19世紀末から20世紀初頭のドイツの大学と官僚制をめぐる研究、そして自身の1960年代末の立論も含む、それ以後の大学論の稜線を辿り、「大学の理念」の凋落とその必然性を追った上で、改めて近代の大学の出発点における一群の大学論に立ち返る。19世紀初頭のプロイセン改革期の大学論、ベルリン大学の構想とかかわって展開されたフィヒテ、シュライエルマッハ、シェリング、フンボルトの大学論(その背景にあるカントの大学論)は、19世紀末から20世紀初頭に「孤独と自由」に象徴されるフンボルト理念として、当時の拡大する大学に対して人文的な防御の盾のように持ち出される大学のイメージとは大きく隔たっている。ハーバーマスは、近代の大学論の出発点となる諸論に立ち返りながら、「孤独と自由」という矮小化されたイメージに囚われることなくその初期の構想群に改めて光を当てている。その中でハーバーマスは、シュライエルマッハのおよそ次のような言葉を引いている。「学的な認識の努力は、何よりもまずその知を伝え合うことに向けられている。認識が、言葉なしに生み出し得ないということが、そうした本質を明確に物語っている。そうであるならば、そうした認識への衝動から、その目的に適った、その実現に必要なすべての結びつき、さまざまな種類の意志の共有、活動の共同体が、形成されていくに違いない。」ハーバーマスは、community of investigators(探究者のコミュニティ)というパースの言葉でそれをとらえ返し、「この考えをいささかの感傷も交えずに支持する」と述べている。近代の大学の出発点にあり、現代において「大学の理念」を問い返すときに基軸となる概念としてハーバーマスはこの提起を選択している。

ハーバーマスの1986年のこうした「大学の理念」の再把握は、彼自身の社会理論、公共性・民主制をめぐる学的企図を背景としている。『公共性の構造転換』(1962)、『認識と関心』(1968)、そして1981年の『コミュニケーション的行為の理論』、その後の『事実性と妥当性』(1992)を通じて、ハーバーマスは、一貫して民主制の基軸となる省察的なコミュニケーションによる秩序の形成、その正統性と可能性、そして歴史的な展開をめぐる問いを進めている。

その問いの脈絡とここでの「大学の理念」の再把握は直接結びついている。community of investigatorsという言葉も、そして「学習プロセス」という副題もまた、開かれたコミュニケーション、Publicな学習プロセスへの企図との関連を意識して選択されているといえるだろう。狭い意味での研究・学究に止まらず、より広い探究と学習のプロセスをも含むコミュニティに、ここでの「大学の理念」をめぐる問いはひらかれている。学的コミュニケーションの共同体としての大学が、それがより広い社会全体の、探究とコミュニケーションを通じた社会形成の可能性の震源地となり、開かれた基盤となり、そしてその省察と批判の錘としての役割を発展的に果たし続けることへの展望へ、ハーバーマスの把握はつながっている。

※この論文は、ハーバーマスの下記の論文集に再録されている。Jurgen Habermas, Eine Art Schadensabwicklung, Suhrkamp, 1987.

実践研究

福井ラウンドテーブル

2021 VIRTUAL (Online) SPRING SESSIONS

2/20(sat) 10:00-17:00 (zoom 接続開始 9:30)

内容は ZONE によって異なります。ウェビナー形式のシンポジウム、ワークショップ、フォーラム等を実施します。

教職大学院改革特別フォーラム *Session0* 10:00-12:00

「理論と実践の融合」への企図 その現段階

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ *Session I・II・III* 13:00-17:00

- A 学校:21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
- B 教師教育:働き方改革と学び合う学校づくり
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
- D International:International Initiative on Teacher Education Reform
- E 探究:学びと教えのニューノーマルを協働探究する
- F インクルーシブ:多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培う

17:30-18:10 省察的実践学会総会

2/21(sun) 10:00-14:10 (zoom 接続開始 9:00)

Session IV ROUND TABLE CROSS SESSIONS 10:00-14:10

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聴き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

| | |
|-------------|--------------------|
| 9:00-10:00 | 接続 |
| 10:00-10:10 | オリエンテーション |
| 10:10-10:30 | 自己紹介&アイスブレイク |
| 10:30-12:10 | 報告 I ～ランチ・ブレイク～ |
| 12:40-14:00 | 報告 II |
| 14:00-14:10 | リフレクション |

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 10:00-14:10 の全日程を 4 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 10:00-14:10 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

2/20 (sat) 10:00-12:00 (zoom 接続開始 9:30)

教職大学院改革特別フォーラム

「理論と実践の融合」への企図 その現段階

教職大学院の展開をめぐる当事者としての省察と展望のために

2006年の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」における「教職大学院」制度の創設の基本的な考え方、「理論と実践の融合」をめざす「基本的方針」が定位され、翌2007年4月、12の教職大学院が出発して以来今日に至るまで全国の国立大学に教職大学院が設置され、54の研究科が設置され、従来の修士課程を教職大学院に一元化する動きも進んでいる。

しかし、教職大学院の全国的な拡大、および大学院一元化の展開の過程において、教職大学院のめざすべきあり方、「基本的方針」への問いはどれだけ深められてきたと言えるだろうか。少子化の状況が続く中、一方で国立大学における教育系部門の縮小・統合への圧力が強まる状況の中でこそ、地域の教育改革を支える教職大学院の役割、そのための「理論と実践の融合」による力量形成のためのアプローチの実質化と深化が問われる。

この特別フォーラムにおいては「理論と実践の融合」・地域と結び教育改革を支える企図をめぐる各地における取り組みを省察し共有しつつ、教職大学院の基本的なあり方をめぐる問いを改めて展開し、今後の展望をひらく機会としたい。

学校改革と教師の力量形成を支える「理論と実践の融合」をめぐる三つの論点

1. 「理論と実践の融合」、省察的实践とその機構への問いの展開と現段階
教職大学院の創設以来の基本的方向定位「理論と実践の融合」はその後の展開の中でどのように進められてきているのか。またそれによって教師の実践的力量形成と学校の改革はどのように展開されていくのか。複数の大学における取り組みを共有しつつ検討し問いを深めていきたい。
2. 「理論と実践の融合」への組織基盤：学校・教育委員会・教職大学院の協働組織を生み出し培う
教職大学院の企図は、学校・教育委員会との協働組織の拡大と深化を土台にしてはじめて展開されていく。各地における教育委員会・学校と教職大学院の協働組織の取り組みを共有していく。
3. 教師教育改革・教職大学院改革の展望とその担い手
教職大学院発足より15年近い展開を経て、新しい世代がその中核を担う段階が生まれてきている。教職大学院における新しい世代の実践と構想を共有し合う場をひらいていきたい。

| | | |
|--------|----------------------------------|-------|
| 〈挨拶〉 | 福井大学 理事 (企画戦略担当)・副学長 | 松木 健一 |
| 〈趣旨説明〉 | 福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 | 遠藤 貴広 |
| 〈報告〉 | 信州大学大学院教育学研究科 高度教職実践専攻 教授 | 畔上 一康 |
| | 大阪市教育委員会事務局 総務部 教育政策課 大学連携企画担当課長 | 比嘉 直子 |
| | 福井県教育総合研究所 教職研修センター長 | 山内 康司 |
| 〈提案〉 | 福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授 | 柳澤 昌一 |
| 〈コメント〉 | 文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長 | 齋藤 潔 |
| 〈司会〉 | 福井大学大学院連合教職開発研究科 客員教授 | 寺岡 英男 |

2/20 (sat) 12:00-17:00 (zoom 接続開始 12:00)

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

－対話を通して学びを深めていくには－

Zone Aではこれまで、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う学校改革のビジョンにもとづき、「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げ、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル2021 Spring Sessionsではwithコロナ、そしてポスト・コロナに向かう状況の中で「主体的・対話的で深い学び」を実現していく鍵は何かを検討し合い、この課題にそれぞれの現場で私たちがどう向き合っているかを共有し、対話の質に焦点を当て、授業をどのようにデザインしていくか、参加者のみなさまとともに協働探究していきます。特にシンポジウムでは、「21世紀の学び」の在り方についても確認しながら対話と議論を重ね、これまでZone Aで蓄積してきた知見をさらに前進させていきます。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-15:10 Webinar Symposiums 深い学びにつながるコミュニティの対話の在り方を探る

13:10-13:40 <対談>

福井大学連合教職大学院 准教授 木村 優

福井大学連合教職大学院 准教授 小林 和雄

13:40-15:10 <シンポジウム>

福井大学教育学部附属幼稚園 副園長 斎藤 弘子

松本市芳川小学校 教諭 上兼 淳

小浜市立小浜第二中学校 校長 加福 秀樹

コーディネーター：福井大学連合教職大学院 准教授 宮下 正史

(敬称略)

Session II 15:30-17:00 Webinar Breakout Room 現状共有と明日への展望 Cross-session

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。小グループ形式で協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出していきます。

Zone B 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職に伴い、若い世代の教員を支え育てる組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革のなかにあります。他方で、教員の働き方改革も急務とされています。こうした状況のなかで教育に携わる者の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされているのではないのでしょうか。

Zone B「教師教育」では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、教師の働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校のあり方について展望を拓いていきます。

コロナ禍が学校に様々な困難と同時に変化の機会をもたらした今こそ、学校という組織のニューノーマルを探り、協働する組織、学び合う組織としての学校づくりを進める好機です。今回のZone Bでは、そうしたこれからの学校の姿を思い描きつつ、教育の質的向上と働き方改革との両立について、多様な実践を共有し、共に考えていきたいと思えます。多くの皆さまの参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス

Session I 13:10-15:20 Symposium

< 話題提供 > 福井県教育庁教育政策課長 星 匡哉

< 実践報告 > 長野県諏訪市立高島小学校教諭（研究主任） 小川 浩貴

福井市森田中学校教頭 高間 祐治

福井県立藤島高等学校校長 松田 透

< コメンテーター > 福井大学連合教職大学院客員教授、元理事 寺岡 英男

< 進行 > 福井大学連合教職大学院教授 淵本 幸嗣

（敬称略）

今後の学校の姿を見据え、教育の質的向上や人材育成と働き方改革との両立を目指した実践を共有します。

Session II 15:20-17:00 Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の実践にどのように生かすことができるか、小グループで協議します。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

ーコロナ禍において学びをつなぐー

6月のラウンドテーブルのZone Cでは「コロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓く」というテーマに取り組みました。当時は、コロナ禍という状況が、いったい私たちにどのような問題をもたらしているのかさえ、明確に捉えきれていない状況でした。そのような中で、「せめてオンラインで」という形で開催しましたが、「オンラインだから」これまで以上に多様な地域から参加してくださいました。そして、お互いが抱えている悩みや不安に耳を傾け合うとともに、この状況でも実践を展開させる具体的な知恵を共有し合いました。さらに、自分たちのコミュニティの存在意義、活動の意味を問い直す機会ともなりました。

しかし、その後も、コロナの影響は収まるどころか、先行きは見えません。経済状況の悪化による生活困窮者の増加、感染者や医療関係者に対する差別などは、社会に多くの分断を生み出し、孤立させられる人々を生み出しています。同時に、これまで私たちの社会がすでに抱えていた課題—都市一極集中の限界と地域の過疎化の問題、高齢者の孤立化、外国籍の住民の孤立化、ジェンダー差別等—も、深刻化しています。

これまで、こうした課題の解決に取り組み、人々の間のつながりを支えてきた、多くのコミュニティでの活動も、計画の変更、延期や中止が繰り返され、コミュニティの持続可能性が脅かされています。そのことは、この「コロナ禍でも」と活動を支えてきた、コミュニティの支え手たちのモチベーションを維持することも、活動を通して紡がれる学びを次世代へと引き継ぐことも、一層に困難にしています。

その一方で、これまで培ってきたコミュニティの学びがあったからこそ、この困難な状況でも紡がれている実践があります。もしくは、オンライン・ツールの普及は、今までになかった人々の交流・つながりを生み出すことも可能にしています—6月のラウンドテーブルがそうだったように。

そこで、今回のZone Cでは、このような問いを投げかけてみたいと思います。「こうした状況下にあっても、私たちが、仲間とつながり合って実践を生み出すことをあきらめないために、今、私たちには、一体どのような学び合いが求められているのか？」

そして、次の3つの角度から、この問いに取り組みます。

- コロナ禍において、コミュニティの学びをつなぐための実践
- そうした実践を支えるためのコーディネーター自身の協働の学び
- コミュニティを超えた学びの実践

こうした実践に学ぶことを通して、コロナ前の状況にコミュニティを戻すことをめざすのではなく、むしろより豊かなつながりを築いていくために、参加者の皆さんとともに考え合う機会としたいと思います。Zone Cでは、持続可能なコミュニティをコーディネートするというメインテーマを様々な角度から検討してきました。前回の2月には、地域の異なる世代の人々、様々な状況の人々が集まることを通して、コミュニティをともに支え合う集団の力を育む実践の報告から「地域のこれからの担い手をいかに育てるか」を考えました。しかし、今のコロナ禍の閉ざされた状況では、これまで一緒に活動していた人たちの様子や、地域の仲間の様子を知ることさえままなりません。そこで、せめてオンラインを通して、自分たちの地域やコミュニティの今を聴き合い、言葉にならない困難を一緒に声にし、この状況の中で一歩踏み出す手がかりを探り合い、これまでの自分たちの実践の中にこそある学びに光をあてたいと思います。

具体的には、これまでシンポジウム形式で会をつくってきましたが、今回は、お互いの状況や情報を共有し合うことをメインにしたいと考えています。オンライン・ツールで参加することのハードルも、できる限り取りのぞく工夫をしています。そして、準備の過程では、参加者の皆さんから、事前にアンケートやオンラインの状況共有会で、様々な声をお寄せいただき、一緒にこの会をつくっています。

| | | |
|-------------|-------------|------------------------|
| Connection | 12:00-13:00 | 接続 |
| Orientation | 13:00-13:10 | 主旨説明 |
| Session I | 13:10-14:00 | 話題提供：福井市春山地区および福井市岡保地区 |
| | 14:00-14:10 | 休憩 |

| | | |
|-------------------|-------------|----------------------|
| | 14:10-14:50 | 小グループセッション①それぞれの取り組み |
| | 14:50-15:10 | 全体セッション |
| Session II | 15:25-15:55 | 話題提供：福井大学探求ネットワーク |
| | 15:55-16:40 | 小グループセッション②今後の展望 |
| | 16:40-17:00 | 全体セッション |

Zone D International

International Initiatives on Teacher Education Reform: Perspectives on “Reflective Lesson Study”

The Sustainable Development Goals (SDGs) to be achieved by 2030 set out to provide inclusive, equitable and quality education for all and to promote lifelong learning opportunities in which improvement of teacher education is one of the touted targets. The University of Fukui Department of Professional Development of Teachers has been in partnership with JICA Africa agenda-specific training on launching projects for teacher education reform through lesson study in the region from 2016. Concurrently, the university has continued to accommodate requests for teacher training from Egypt, Saudi Arabia, Singapore, Thailand, among others with Fukui-style lesson study, more known as “Reflective Lesson Study” as its main core. These teacher reform projects have resulted in contextualized variations of lesson study around the world: each case is unique though they all fall under a bigger umbrella of the vision to uplift the quality of education. Accordingly, the Fukui Bi-Annual Roundtable Zone D: International is a platform for sharing, reflecting and networking on different reforms on teacher education around the world.

Zone D: International Teacher Education Reform consists of a symposium and small group discussions. The first session (symposium) explores the theme of “Perspectives on “Reflective Lesson Study””. At the symposium, past participants from Africa of the knowledge co-creation program between JICA and the University of Fukui will speak of their experiences in the training, their new gained perspectives of reflective lesson study, and their current initiatives towards reflective lesson study expansion. Implementation, challenges and collaboration are some of the key topics that will be reflected upon to gain insights of local and global perspectives of reflective lesson study. In the subsequent session of small groups, participants will be asked to concretely think of and relate such big ideas to their respective institutions or school practices. All sessions in this zone will be conducted in English.

Connection 14:15-15:00 接続

Session I 15:00-16:40 Symposiums Perspectives on “Reflective Lesson Study”

Past DPDT-JICA Knowledge Co-Creation Program African Participants

- 〈Panelist〉
1. Malawi: Moyo Ganizani, Jesuit Secondary School Teacher, Teacher
 2. Uganda: Betty Auma, Regional Lesson Study Trainer, Dr. Obote College
 3. Ghana: Thomas Arboh, Manager, Police Education Unit Board Member, The National Teaching Council
- 〈Commentator〉 Takahiro Endo, University of Fukui, Associate Professor
- 〈Coordinator〉 Pauline Mangulabnan, University of Fukui, Assistant Professor

Session II 16:40-17:30 Forums

Exchange of practices (based on the theme presented in the symposium)

17:30-17:40 Closing

Zone E 探究

学びと教えのニューノーマルを協働探究する

—若者たちと大人たちによる新しい学びの地図のデッサン—

2020年春、COVID-19パンデミックに対する教育的応答として始まったプロジェクト、中高生・大学生をはじめとした若者たちと大人たちによる「学びと教えのニューノーマル」の協働探究の歩みは、いよいよ最初の「集大成」に向けて舵をきります。2021年1月12日（火）のNET WORKING MEETINGから「構え」を整えはじめ「私たちがつくりたい社会・世界のウェルビーイング」「今、そしてこれから必要なチカラとココロ」の対話を重ね、2月20日（土）21日（日）実践研究福井ラウンドテーブルにて「楽しい学校」と「評価・受験のニューノーマル」を協働探究し「新しい学びの地図」の中にデッサンしていきます。

Zone F インクルーシブ

多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培う

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、この度、「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。

「一人ひとりの子どもが自らの個性や能力を発揮することができる学習環境をいかにコーディネートするのか」、「インクルーシブ教育の根幹にある個に応じた支援を学級という集団の中でどのように行ない、いかにして子どもたち同士の学び合いや自治活動へと繋げていくのか」、「多様な子どもがいるからこそ生まれる育ちや学びとはどのようなものであるのか」、「地域で共に生きることをいかに支えるのか」、今まさに直面している課題について、参加者のみなさまと共に探究していきたいと思えます。

日頃の実践の中で感じている悩み、課題、考え、これまでに取り組んできた小さなあるいは大きなチャレンジを携えてご参加ください。互いの実践を聴き、語り合うことを通じ、「このメンバーだからこそ生まれる学び」を参加者のみなさんと共に形作っていききたいと思えます。

Connection 12:00-13:00 接続テスト・接続

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス

Session I 13:10-15:00 Symposium 多様な子どもたちが学び合うコミュニティを創る

<シンポジスト>

群馬県立二葉特別支援学校 教諭 南雲 敏秀 氏

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 研究主任

川崎 耕介 氏

あわら市本荘小学校 校長 志田 智子 氏

<コメンテーター> 福井市足羽小学校 校長 小杉 真一郎 氏
<コーディネーター> 福井大学 理事（企画戦略担当）・副学長 松木 健一

Session II 15:15-17:00 Forums

A.小学校における授業実践

報告者：長野県伊那市立伊那小学校 井澤 滋 氏
コメンテーター：附属義務教育学校前期課程 川崎 耕介 氏
進行：福井大学連合教職大学院 荒木 良子

B.高等学校における特別支援教育の取り組み

報告者：福井県立奥越明成高等学校 石倉 千智 氏
コメンテーター：福井市足羽小学校 小杉 真一郎 氏
進行：福井大学連合教職大学院 新井 豊吉

C.特別支援学校における授業実践

報告者：福井大学教育学部附属特別支援学校 小嵐 栄輔 氏
コメンテーター：群馬県立二葉特別支援学校 南雲 敏秀 氏
進行：福井大学連合教職大学院 常廣 和美

※タイムスケジュールは今後変更になる場合があります。

福井県の特別支援教育を牽引し、本ラウンドテーブル Zone Fでもコメンテーターをお願いしておりました福井市足羽小学校校長 小杉真一郎先生が令和3年1月27日にご逝去されました。学校がすべての子ども達の笑顔が輝く場であることを願って真摯に仕事に取り組んでこられた小杉先生の思いを大切に受け継ぎながら、私たちはインクルーシブな社会の実現に向け、実践と省察を続けていきたいと思っております。小杉先生のこれまでの御尽力に感謝申し上げるとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2/21 (sun) 10:00-14:10

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

9:00-10:00 接続

10:00-10:10 オリエンテーション

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。

10:10-10:30 自己紹介&アイスブレイク

それぞれが今取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

10:30-12:10 報告 I

～ランチ・ブレイク～

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

12:40-14:00 報告 II

14:00-14:10 リフレクション

報告 II のあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごと会を閉じます。

ラウンドテーブル



実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にあるものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院で

の長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

(柳澤 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 2009.3.31)

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2020.6

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男 (この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働 (第 1 回)
For Reflective Practice、 Professional Development、 and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名) 京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル (省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む) (第 3 回)
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル (第 4 回)
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル (第 5 回)
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル (第 6 回) 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる (於熱海～2009)
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる (於早稲田大学) ～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 8 回 参加者 100 名超)
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回)
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回) 三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 12 回) 渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回) 藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008 (第 14 回) 横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008 (第 15 回) 人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回) 稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 17 回) 5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
(分野ごとのセッション始まる)
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後) 鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 19 回)：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える) 門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 21 回) 松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回) (名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を超える

兼日本社会教育学会東海北陸研究集会

- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第24回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第25回)
- 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)
- 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第26回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第27回)
- 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第28回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第29回)
- 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、
- 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第30回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第31回) 参加者総数 547 名
- 7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
- 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第32回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第33回) 参加者総数 566 名
- 10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.15-21 マラウイラウンドテーブル
- 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
- 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第34回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第35回) 参加者総数 476 名
- 10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.23 マラウイラウンドテーブル
- 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
- 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
- 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)
- 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第36回) 参加者総数 930 名
- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions (第37回) 参加者総数 426 名
- 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、 10.23 マラウイラウンドテーブル、

- 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、
 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
 2020.2.15-16 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions (第 38 回) 参加者総数 800 名程度
 3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
 2020.6-20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions (第 39 回) 参加者総数 500 名程度
 11.21 東京サテライトラウンドテーブル
 11.21 関西ラウンドテーブル

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの^{いざな}誘い ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院准教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティを耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていています。ラウンドテーブルの創世記には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的実践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指し

たさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21 世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミ

ユニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦と

はつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院とJICAとの連携を基盤として、アフリカのマラウィでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

1 あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウエンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

2 現代社会の特徴を表す4つの言葉: Volatility (不安定)、Uncertainty (不確実)、Complexity (複雑)、Ambiguity (曖昧) の頭文字をとった造語。

3 コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

Archive —アーカイブ—

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 と、ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.30 (11.04.02) と No. 97 (17.05.13) からご紹介いたします。

[Newsletter No.30 \(11.04.02\) より](#)

ラウンドテーブル 2011 に参加して

スクールリーダー養成コース 2年 / 大野市立有終西小学校 川端 英郁

昨年度の6月のラウンドテーブルと同じように、たくさんの方が参加して行われた今回の学校改革実践研究「福井ラウンドテーブル 2011」は、私にとって特別なラウンドテーブルだった。福井大学教職大学院に入学して2年。この2年間の実践を長期実践報告としてなんとかまとめ、その最終報告をこのラウンドテーブルで行うことになっていたからだ。さらに、その長期実践報告が冊子となって配布され、それを使って最終報告を行うということも、特別なラウンドテーブルだと感じる要因になっていたと思う。

さて、「福井ラウンドテーブル 2011」だが、今回も運営される福井大学教職大学院の先生方のたくさんのお思いや工夫があふれるものだった。例えば、参加人数がとても多かったり学校教育以外の分野の方も参加されていたりしているということだ。しかも、県内にとどまらず県外からの参加者もとても多かった。これは、常日頃から先生方が広くアンテナを張って情報を集めたり発信したりすることができることで、フットワークの軽さやアクションの多さをうかがい知ることができた。1日目のセッションⅢのテーマ別の話し合いで「学校拠点の実践研究の持続的な発展」の1会場を運営をさせていただいたが、このときに発表されたのが、岐阜県恵那市立長島小学校と栃木県鹿沼市立みなみ小学校の先生方だった。お二人ともパワーポイントや印刷物を使っての発表だったが、その資料の準備や連絡調整を当然ながら教職大学院側で行っているだろうし、それが、いくつもの会場での準備となるとそれはそれは大変な労力だろうと想像できる。その点から考えても、このラウンドテーブルを参加者にとってよいものにしたいという、先生方の思いが伝わって

る。また、セッションがいくつも用意されていた。これは、参加者が自分と同じ分野の方の話を聞いたりそれについて語ったりすることで、自分の分野をさらに伸ばし深めていくヒントをもらえる。しかも、他分野の実践に触れることで、自分の実践を振り返ることができ、自分の実践を深めることにも役に立つ。2日目のセッションⅤ「協働探求 展開を語る／プロセスを聞き取る」では、公民館主事の実践や千葉県松戸市立小金中学校の理科担当の先生から実践を聞くことができた。特に小金中学校の実践は、BDF（バイオ・ディーゼル・フューエル：注）に関する探求的学習の実践だったが、企業と連携したり、地域に出向いての活動であったりと、本校が行っている地域と連携した活動とよく似ていたので、実践を聞き、語っていても本当に自分たちの実践に活かせるアイデアが多かった。特に、各種事業に申請し補助金を得て実践に利用していたり、地域の企業に依頼して協力を得たりなど、本校で行っている連携以外の実践が目新しかった。このように、今回のラウンドテーブルに参加しなければ知ることができなかったものに触れることができたのも、先生方の日頃のフットワークの軽さやアクションの多さができる技なのではないだろうか。

ところで、自分の実践報告だが、2日目に行った。1時間40分という長い時間をいただいたにもかかわらず、時間が少し足りなくなってしまった。わかっていたことだが、それだけ長期実践報告については、詳しく聞いてもらいたいという思いが強かった。勤務しながら教職大学院に在籍していた2年間の思いは、一言では語り尽くせない。つたない2年間の実践だったが、学校の仲間と一緒に作り上げてきたものは、たくさん聞いてもらいたいものだ。

語るだけでなく、他分野の方の話を聞くことで、これからの実践のヒントにできたらと思っているので、つつい時間を使ってしまう。ただ、意味なく時間を使ったのではなく、充実した時間を同じテーブルの皆さんと共有できたことも、意味深く、自分にとってはこれからの教員人生に生きる充実した時間だった。

このように様々な実践に出会え、語ることで、さらにたくさんの知のお土産をもらえるラウンドテーブルだからこそ、魅力があり参加者も多いのだと思う。私は今年度で教職大学院を卒業することになるが、卒業後もこのラウンドテーブルになんらかの関わりをもちながら参加し、自分の知をそして実践力を高めることができたらと考えている。教職大学院で学んで良かったと思えるその一つが、このラウンドテーブルなのだ。

このように教職大学院で学んだことで、ラウンドテーブルに出会え、自分の知をそして意識を高めることができた。ただ、今回東北地方や関東の一部で起こった東北関東大震災で被災され、今も不安な中

で生活されている方々のことを考えると、このような学びができ、大好きな学校や子どもたちと日々の生活を何不自由なく送ることができる幸せに感謝しなければならないと強く思う。そして、一つ一つの命がどれだけ大切かということを改めて実感することができた。被災された方々のこれからの健康と少しでも早い復興を祈りながら、学校現場で自分に今何ができるかということを実感しながら、今後も必死に頑張っていきたい。

注：菜種油・ひまわり油など生物由来の油やてんぷら油などから作られるディーゼルエンジン用燃料の総称。燃えてCO₂を排出しても、CO₂とカウントされない。(京都議定書では、植物由来のCO₂排出は、排出量としてカウントされないことになっている。) バイオディーゼルは、CO₂削減の手段として注目されている。また、硫黄酸化物(SO_x)がほとんど出ないという利点もある。(環境 goo のHP を参考)

教職専門性開発専攻コース2年 小出 哲也

教職大学院に入学して早2年がたち、2月27日のラウンドテーブルで2年間の実践を報告した。昨年度は、主に聞く立場だったが、今年度は発表ということで上手く話せるか不安があった。ラウンドテーブルの良い点は、異なる学校種、異なる教科の方の実践報告が聞け、討議できることである。同じ学校種や同じ教科で話した方が良いとの意見もあるかもしれない。その考えも正しい。ただ、異なる人に実践を伝えることで再度自分の実践を振り返ることができるし、異なる立場の実践を聞くことにより自分の実践に新たに活かすこともできる。それだけ、視点が広がるのではないだろうか。それが、福井県内だけでなく福井県外の方の報告も聞ける。このような場は福井大学のラウンドテーブル以外なかなか存在しないと思う。まず私の報告の内容を振り返りたい。

2年前、家庭で深刻な問題のある児童との関わりから、どのような児童にも学びたい、知りたいという思いはあるということを感じた。そのような経験からどのような児童・生徒に対しても、学習することが楽しいと思えるような授業力をつけたい、教室を楽しい学びの空間にしたいという思いから教職大学院を志望した。そして、2年間の長期実践

報告書のタイトルを「子どもが楽しく学べる授業づくりをめざして」にした理由としては、どんなやり方にせよ児童が学習するのならば、子どもが楽しんで授業を受けられるのが最善だと考えていたからだ。子どもが「学ぶことって楽しい。もっとやりたい、知りたい。」と思うことを大事にしたいと私は考えている。そのために、授業者はどのような授業づくりが必要か、2年間参観して気づいたことや、実際に授業を実践して感じたことを報告した。

失敗し試行錯誤することでしか、授業力は伸びないということを教えて頂き、途中からインターンシップは過去の経験や新しく学んだことを自分なりにアレンジして実践する場であることを感じた。失敗を恐れずどんどんと挑戦しなければもったいないと感じるようになった。インターンシップ1年目での前半でのこと。4年生のクラスで実習を経験したが、ここで印象に残っていることは児童一人ひとりが自分のクラスに対して行う役割は何か、それぞれに考えをもっていることであった。つまり、決して人まかせにはしていないことである。他人の意見に耳を傾け、自分の意見をしっかりとつ。グループで協力したり、注意しあったりする関係性を大事にする。個人の問題はクラス全体の問題として考える。

とにかく、クラスの和やつながりがあるクラスだった。授業を参観させてもらったが、児童にとって身近なことを導入で設定していた。そして必ず児童を迷わせる課題を設定していた。この迷いというものを授業の中で大事にしていかなければならないと感じた。求める答えは一つかもしれないが、そこにたどりつくまでの方法は何通りもある。それを、みんなで考えたり意見を戦わせたりすることによって、判断力が高まったり、コミュニケーション力も培えたりすると思う。インターンシップ2年目でのこと。ここでは、グループ学習の支援の仕方を学んだ。机間支援の方法について悩んでいたが、ようやくどのように支援したらよいか自分なりの方法を見つけることができた。まず、グループでの活動が活性化しているのか停滞しているのかを見極める必要がある。そして停滞しているグループにはどこまでできているか説明させ、どこで悩んでいるか言葉にさせることが大切である。その意見を聞いた上で助言をすること。そうすることによってグループ学習が活性化していく。子どもが意欲的に学習に取り組むことができると感じた。

ある大学の教職大学院の先生は、学生が1年から2年間インターンをするのは画期的だとおっしゃってくれた。また、現職の先生方も研究テーマが分かれています。総体的に学ぶことはできないと聞き、自分たちはめぐまれた環境の中で実習できたことを感じた。しかし、私の発表を、グループの方々共感的に聞いてくれる一方で厳しい意見も出た。去年卒業された先輩からは、まだまだ自分の視点と向き合っていないと厳しく指摘された。人から言われたことを納得していないのに自分の言葉にしているとのこと。まだまだ課題だらけである。指摘された部分を今後、克服できるようにしていきたい。ラウンドテーブルで実践を報告することによって、今まで

やってきたことを改めて振り返ることができた。報告をしながら、自分の中での時はこうすればよかったのではないかとその場で再構成している自分がいた。

他の先生の話を通して感じたのは、常に現場にはさまざまな問題が横たわっているということだ。どの先生もそれを解決し良い方向にもっていこうと必死である。その解決策として元至民中学校校長の山下先生が、「前例踏襲は良くない。やれるところを少しずつやっていく。変えられるところを少しずつ変えていく。とりあえずやってみよう」と声をあげることが大事。」という話をされた。今後自分がそのような場面に出会ったらどうしたらよいか考えさせられる。このラウンドテーブルでは、環境は違えど自分の学校や実践と照らし合わせながら話が聞けるのである。また、学校全体で協働して取り組んでいくことが大事だということも感じた。そういう意味からも、他の先生の実践を真っ向から否定するような環境ではなく、気軽に相談できる環境こそが望ましいということを経験から実感した。

正直、今まで、教職大学院で取り組んできた合同カンファレンスやラウンドテーブルは本当の意味でその意義を見い出せずにいた。ただ、2年間を終える今、今回のラウンドテーブルにおいて長期実践を報告するにあたって、学校種、教科を超えて報告を聞きあうことの意義をようやく理解できたように思う。環境は違うけれど、思いはみんな同じである。「良い授業をしたい。良い学校にしたい。でもどうしたらよいか分からない。」だから、悩みながら試行錯誤すると思う。いろいろな実践を聞いて、参考にしたい。そして自分の悩みを共有したい。今回のラウンドテーブルを通して、実践・省察（振り返り）・語りの重要性が腑に落ちた。

[Newsletter No.97 \(17.05.13\) より](#)

保幼小教育フォーラムに参加して

愛荘町立秦荘幼稚園 矢守 大智 西川 絵理 今居 静香

今回、保幼小教育フォーラムに参加させてもらったことは私たちにとって、とてもいい刺激となりました。私たちが得たものとして、三点のことがあげられます。

一点目は、伝え方の重要性です。ポスターセッション

を初めてさせていただきました。多くの方が聞いてくださり、嬉しかったのと同時に伝え方が未熟だと感じました。他の校舎の発表を見ていると、丁寧に、聞きやすく話されていました。これは、園で、職員同士で話をする際や、他園との交流を図るとき

に、活かされるのではないかと思いました。

二点目は、互いに学びあう姿勢です。話題提供を受けて、盛んに意見交換されていた様子がとても印象的でした。また、互いの実践に敬意を示しておられ、さらに深まるにはどうすればいいのかを考えておられました。話を聞くだけではなく、それを受けて、どのように自分たちが実践の中で活かさせていけるだろうかと考えておられるからこそだと思います。今回、話題提供してくださった、小学校での実践はとても興味深く、小学校だけでなく園でも意識できる視点がたくさんありました。その実践も、いろいろなところに学びに行かれたことで実践しようと思われたと聞き、自ら学ぶことはとても有意義なことを得られると感じました。互いに学びあうという姿勢が今後私たちも見習っていききたいところだと

思いました。

三点目は、教師の熱意や向上心がとても大切であるということです。このフォーラムに参加されていた方は、よりよい教育を目指すために参加されている方ばかりでした。私たちは、道半ばですが、その中でこれからどのように教育に携わっていくべきなのかを学ばせていただくことができ、意欲にもつながりました。ある園の発表では、自ら学び、園の改革をされている様子を教えていただきました。熱意をもち、現状に満足しないでさらに向上心をもって取り組まれています。このような姿勢をこれから大切にしていきたいと感じました。

今回学んだことを活かして、職員同士が意欲をもって日々の保育をよりよくする取り組みができるように共有していきたいと思います。

保幼小連携フォーラムに参加して感じたこと

高浜町保育実践研究グループ ぴっか

初めに岸野先生より、「現在、保幼小連携接続の重要性が理解されつつあり、その本質は子どもの育ちや学びを保育所・幼稚園・認定子ども園から学校へと繋げていくところにある」というお話があり、改めて子どもたちに継続的な育ちや学びの場を保障していくことも教師や保育者の1つの役割であると感じました。

その後、保育園、幼稚園、小学校、それぞれの実践と、教師や保育者が子どもの育ちや学びを支える力をいかにして高めていったかという報告がありました。午後から Zone A にて発表を控えているということもあり、興味深く報告を聞かせていただきました。

同じ幼児教育に携わる者として、双葉保育園と豊郷幼稚園の報告には共感できる部分が非常に多かったです。“子どもの主体性あるたくましい育ち”をどちらの園でも大切にされており、環境の再構築という言葉のもと職員全員で保育を試行錯誤されている様子に、子どもの主体性を引き出すためには、第一に保育者の主体性が問われるのだと痛感しました。また、その主体性が保幼小連携接続においても活かされていくのだと思います。そして、小学校の教師という視点からの福井市西藤島小学校の報告には、「ここまで幼児期の育ちを大切にし、伸ばしていただけるのか」と率直に嬉しく思いました。就学を見据え“学校で通用する子ども”

になるよう表面ばかりを気にしがちですが、本当に大切なことは“学校で学ぶ力のある子ども”に育てることだと感じます。幼児期のほんの些細な経験が小学校での学習に結び付き、子どもたちの生きていく力に繋がっていくのだと思いました。

それぞれ3つが異なる視点からの報告でしたが、共通する部分が各所にあり、それをこのような機会をもって学びあうことで子どもたちの育ちを支える環境を設定できるという手応えを感じ、改めて保幼小連携の重要性について確認できました。

しかし、実際のところは今回フォーラムに参加するまで、保幼小連携接続が重要であることを感じながら、「学校の先生方に自分たちの実践はどのように映るのだろう…」と不安に思う部分があり、どこか一步踏み込めないところがあったように思います。ですが、今回、実践や思いを聞き、伝え合うことで学校の先生方から「よい実践をされているんですね。」「大事に育てられた子どもさんを学校でも責任を持って預かりします。」というような温かい言葉をたくさんいただき、自信に繋がったと同時に、躊躇う必要はどこにもなかったことに気づかされました。ラウンドテーブルなどの場に、まだまだ幼児教育という立場からの参加が少ない現状があるのは、私たちと同じようにどこか一步踏み込めず迷っている部分が少ないからなのではないかと推測します。今回を一つのきっかけとして、今後も保幼小連

連携に前向きに取り組むと共に、幼児教育の立場からの参加が増え、子どもたちの学びや育ちについて語り合えるコミュニティが広がることを願っています。

子どもの育ちを支える環境を作るために、現在、

高浜町立保育所は保育所内で職員間の連携を見直す段階にあります。今後は他の園にも視野を広げている、密な連携がとれた上で小学校をはじめとする他の機関とも繋がりを持ち、互いに支え合える保幼小連携接続の形を築いていきたいです。

長期的実践を省察できた SPS*

福井市美山中学校 教諭 佐々木 庸介

本校は市街地から15kmほど離れた杉の林に囲まれた中学校です。小規模校で、就学前から顔見知りの生徒たちは中学校卒業までほぼ決まった集団の中で生活をしています。他校と学校文化を紹介しあい、実践を共有する中で省察し、今後の実践に生かしてほしいという思いから昨年度に引き続き SPS に参加させていただきました。

今回は2年生の3名が SPS へ参加しました。2年生は総合的な学習の時間に3年間を通して「新幹線福井駅開業時の主権者として福井の未来を考える」というテーマのもと学習を行ってきています。私は、「生徒が自分たちの学びを語るのであれば、自信をもって考えてきた過程を紹介できるこのテーマでいこう」と考えポスターを作りました。すると生徒から「美山中の理科の授業を発表しましょう。班で疑問を解決していくような授業で面白いので。」と提案され、急遽追加でポスターを作りました。

SPS が始まると、まず生徒は越廼小の発表を見に行きました。生徒は「僕たちがやっていることに似ている。小学生なのに地域を盛り上げようとしているところがすごい。」と驚いていました。また、「自分たちでゆるキャラを作って握手をしてもらうだけでもかなり福井を知ってもらうために効果がありそうだ。僕たちもやってみたい。」と感心していました。

さらに、県内外の高校生が語りかけるように発表する姿、その場で質問を受け思ったことを語る様子などを見て「あんな風に発表してみたい。」「僕たちでもわかりやすく発表してくれている。」というつぶやきもありました。自分たちの発表の前に他校の熱く語る姿を見て、自分たちの発表に対しての意欲が高まったように見えました。

他校の発表を聞く前の生徒はポスターの上から順番に話していこうと考えていたようでしたが、発表直前にどうしたら人を引き付けることができる

か考えて「初めに（ポスターの下の部分にある）アンケートの結果から伝えて、えっと思わせてからなぜそうなるかを説明しよう。」「どう思いますか？とか見ている人に聞いてみたらどうだろうか。」と意見を交わし、発表を始めました。発表では自信满满に自分たちの学びを語る姿が見られました。

発表後に行われた夢語り会では、具体的に普段の授業や活動の様子を共有しました。私が入ったグループでは「決めごとの難しさ」についての話題が盛り上がりました。「何かを決めているときに意見が割れ、否定的な意見が次々とする場合、実行委員としてどうするべきか」という福大附属中の生徒の話題提供をきっかけに、自分の学校ならどうするかなど具体的な話が展開していきました。本校の生徒は「美山中ではすんなり決まってしまうことが多い。」「そもそも全会一致にする必要は？」など異なる文化に驚いていたようでした。

他のグループで話合いをしていた本校の生徒は、「理科以外の授業もグループ活動で行い、みんなで話合いながら学んでいくスタイルがすごいと思いました。それならグループで取り組むテストというものもあっていいんじゃないかなと思います。」「僕はグループ活動がとても楽しく勉強になると思っていましたが、ほかの学校の人も同じように思っていました。僕と同じように思っている人がいたことがすごいと思いました。とても面白かったです。」「テレビやネットを使った授業・宿題があるといいという話になったのですが、僕もそう思いました。」など興奮した様子でした。

本校では自分たちの実践を異質な他者に伝えるという機会をあまり作ることができません。H28年度の文化祭では地域の方々と後輩へ学習過程を伝え、将来の美山地区に関する討論会を開きました。しかしこれは美山を知っている人への発表なので、生徒も詳細な説明をしませんでした。今回の SPS

では、美山を知らない人に伝える必要が出てきたことで、根底となるような部分から説明する必要が出てきました。四苦八苦しながらも生徒は実践を振り返り、発表を考えることができました。

SPS の発表を通して、普段授業で行っているような数時間毎の振り返りではなく、長期の学習過程を俯瞰し、意味づけていく活動によって自分たちの学びの意味を深く理解できたのではないかと思います。そして、夢語ろう会では、文化や背景が異なる学校でも似た価値観を持って実践が展開されていることに気づき、多様な文脈においても共通点が見出されることを嬉しく思ったようでした。また、反対に自分たちの学校には無く、取り入れたいと思う部分も多くあったようでした。

私も生徒がどこに意味を感じて普段の授業に臨んでいるのか理解できました。グループ活動を有意義に思っていること、課題を解決していくことを楽しむのが授業の醍醐味であると感じていること、ほかの学校がしていない自分たちだけの学びを伝え「驚かせたい」など学びに誇りを持っていることなど、生徒が探究しつづける授業をさらに良いものにするためのヒントがもらえたように感じます。

SPS を通して、教師も生徒も長期的実践を省察し学び合えました。今後さらに実践を進め、再び報告できればと思います。

*SPS: Student Poster Session の略

International Zone: A Brief Description of Activities from the February 2017 Round Table Event

福井大学教職大学院 講師 ハートマン エリザベス 杉野

ラウンドテーブルの国際ゾーンの概要である。別途発行する国際ニューズレターにもっとくわしく説明する。

The University of Fukui was pleased to have held the first international zone at this year's Round Table. Activities were held at Fuzoku Elementary and Junior High Schools and the University of Fukui on February 17-19, 2017. Participants included 53 teachers, administrators, and educators from eleven countries including Australia, Bhutan, Cambodia, Columbia, Ethiopia, Indonesia, Malawi, the Philippines, Uganda, United States of America, and, of course, Japan.

On Friday, participants learned about the University of Fukui's attached schools, Fuzoku Junior High School and Fuzoku Elementary School. A presentation by Pauline Mangulabnan described the schools' philosophy, background, and approach to professional development. Participants were eager to connect these ideas to their own contexts during small group discussions. In addition, participants

attended two classroom observations: a mathematics, English, or science class at the junior high school and an elementary mathematics class. Mr. Kinoshita (junior high science), Ms. Yanagi (junior high music), Mr. Makita (junior high vice principal), and Ms. Watanabe (elementary mathematics) were able to debrief about the lessons and the inquiry-based teaching style at Fuzoku.

On Saturday, the international participants attended the Round Table Symposium events. The morning began with a presentation and small group discussions about the Department of Professional Development of Teachers at the University of Fukui. In the afternoon, the four educators from Africa presented about their efforts around engaging in Lesson Study since participating in the November 2016 JICA – University of Fukui Knowledge Co-Creation Program. After these presentations, participants joined Zone D to learn about Lesson Study efforts in Japan. The day concluded with small group discussions about the Symposium events.

On the final day, participants shared their practice reports in small groups. Each group included educators from Japan as well as a mix of other countries. The reports covered a wide range of topics including project-based learning, special education programs, challenges faced by administrators, and classroom case studies. Participants commented that while their contexts and roles were very different, there was commonality in the challenges of creating productive learning environments and meaningful educational experiences. International participants commented that they learned a lot from their international colleagues and from the experiences in Fukui.

Personal Reflection: I believe that the feedback and comments from participants reflect the success of this first international zone. This event was a valuable springboard for future events and collaboration. Beginning the event with a school visit to Fuzoku was extremely valuable. Because of this school visit, participants were constantly talking and thinking about students and their experiences in classrooms. As a co-facilitator of the international zone, I feel that managing the event was challenging

but it was a worthwhile event for all participants. I would like to express my gratitude for the teachers at Fuzoku for opening up their classrooms, the participants who travelled long distances to come to Fukui, and the teacher trainees and my colleagues who helped plan this event. In particular, thank you to Pauline Mangulabnan. Without her, this event would not have been possible. I am sincerely looking forward to future International Round Tables.

参加者からのフィードバックやコメントは、この最初の国際ゾーンの成功を反映していると思う。このイベントは、今後のコラボレーションのための良い出発点である。附属中小学校訪問でこのイベントを開始できて、とてもよかったと思う。その学校訪問があったからこそ、参加者は常に生徒について話し、考えていた。国際ゾーンの共同ファシリテーターとして、複雑なイベントを行うことは難しかったが、価値のあるイベントだったと思う。授業を見せてくれた先生方、遠いところから福井に来てくれた参加者、ラウンドテーブルの企画を手伝ってくれた教員研修留学生や同僚に、心から感謝したい。特に、Pauline Mangulabnanに感謝する。彼女のおかげで国際ゾーンが行えた。次の国際ラウンドテーブルを楽しみにしている。

※ご所属は当時のものです。

教職大学院 Newsletter **No.143**

2021.2.20 発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp
